



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	変化表現の共起関係：「～なる」「～する」「～化」を対象に
Author(s)	池上, 素子
Citation	国語国文研究, 123, 92(1)-77(16)
Issue Date	2003-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93716
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_123_92-77.pdf



変化表現の共起関係

——「～なる」「～する」「～化(する)」を対象に——

池 上 素 子

1. はじめに

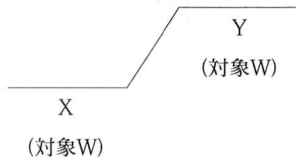
変化を表す表現に関する研究は、これまで様々になされてきた。「～なる」「～する」に関しても、池上嘉(1981)に代表されるように、英語との対照研究を中心に種々行われてきた。しかし、その多くは日英語の全体的な傾向を指摘したもので、個別の語の共起関係について言及したものはまだ少ない。そこで筆者は、池上(2002)において、「なる」を対象に、前接する語との共起関係を考察することにより、「～なる」の用法の明確化を図った。本研究では、これに、さらに「～する」および「～化(する)」を加えて考察することにより、日本語において「変化」がどのように捉えられているかを探る。「～する」「～化(する)」は、1) その語自体は変化のみを表し、どのような変化かは表さない、2) 変化する対象や手段に制約がない、という点で「～なる」と共通しており、種々の要素が混在しない、純粋に「変化」を表す表現であると言える。したがって、日本語における変化の捉え方を探る上で、これらを対象にして考察することには意義があると考ええる。

文中、「なる」「する」は動詞そのものを、「化」は接辞そのものを表す。「なる／する／化」に前接する語を便宜上前項と呼ぶ。「～なる／する」は、前項と「なる／する」から成る句を表し、「～化(する)」は動詞用法も含めた「前項＋化」の合成語を指す。ただし、本稿では合成語としての「～化(する)」の典型的な性格を探るため、「二字以上の前項＋化」を取り上げており、また「水酸化」のような化合物の名前は、変化を表す表現とは考えにくいいため考察対象から外している。さらに「なる文／する文」は「～なる／する」を含む文を指す。なお、本稿では「～ことになる／する」は扱っていない。

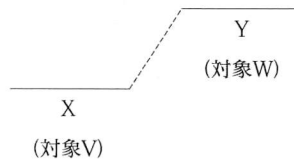
2. 変化のタイプ

本論に入る前に意味の観点から変化表現を分類しておく。変化のタイプによって、共起不可能な語が異なるからである。変化文には大きく分けて四つのタイプが考えられる。

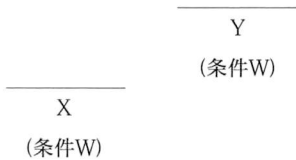
イ) 属性変化



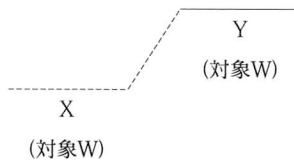
ロ) 比較・対照を変化と捉えるタイプ



ハ) 項目の交替



ニ) 形骸化した表現



イ) は、同一対象の属性の変化を表す属性変化である。例えば、次の(1)・(2)のような文である（以下、用例の下線は筆者による。出典のあるものは（ ）内に略号を記す。略号のないものについては筆者の作例である）。

- (1) 母は優しくなった。
- (2) 彼は息子を会社員にした。

この他、これに類似する文として

- (3) 私は嬉しくなった。
- (4) 日本経済を回復させることが重要化している。

のようなものがある。これらは、一時的な感情の状態や話者の判断であって、対象に恒常的に備わる属性とは言い難いため、正確には属性変化とは言えない。しかし、特定の同一対象の状態変化を表しているという点で共通しているため、本稿ではイ) に入れておく。

ロ) は、他のものの性状、性質等との比較・対照を変化と捉える場合である¹⁾。例えば、

- (5) 戦後、日本の女性は強くなった。

のようなものである。これは、特定のある女性の性状が変化したことを表しているわけではない。戦前の女性と比較・対照して、戦後の女性の方が強いということを変化と捉えているのである。

ハ) は、その条件に当てはまる項目の交替を表す変化である²⁾³⁾。例えば、

(6) 彼の勤務先は東京から長野になった。

のようなものである。これもやはり特定の同一対象が変化することを意味しているわけではない。「彼の勤務先」という条件に当てはまる項目が「東京」から「長野」に交替したことを表しているのである。

最後に、二) は、(7)・(8)のようなものを指す。

(7) 家の裏は小高い丘になっている。

(8) 本稿では「なる」を中心にして論ずる。

以上、変化の四つのタイプについて述べた。「～なる」「～する」は上の全てのタイプの変化を表しうるが、「～化(する)」は基本的にイ)・ロ)しか表せない。「～なる」「～する」はそれだけ変化の捉え方が広いと言える。なお、二)は形骸化した表現なので、正確には変化とは言えないが、後で触れるところがあるので載せておく。

3. 前項との共起制限—三者に共通の制約—

筆者は、「なる」「する」「化」に前接しない(しにくい)語として、

- a) 述語にならない語
- b) 変化する前の状態が考えられない語
- c) 時間軸上の一時点にのみ限定された事態を描写する語
- d) 他に特定の言い方があり、そちらを優先させる語

の四つが挙げられると考える(ただし、動詞が前項の場合、該当する制約はb)のみである)。a)～d)は、語が持つ意味特徴、および用法上の観点から規定したものである。これらは、「～なる／する／化(する)」のいずれにも当てはまるものであるが、記述が煩雑になるため、以下では、主に「～なる」について例を挙げ、どのような語が前接しないか(しにくい)かを見ていく。また、変化のタイプとしては属性変化の場合を中心に述べ、後で他のタイプとの関係について言及する。

3.1 属性変化の場合

3.1.1 述語にならない語

主体Wが状態Yに変化することを表す「WはY+なる／する／化(する)」という表現が成立するためには、そのように変化した結果の状態を表す表現「WはY」が成り立つことが前提となる。したがって、「WはY」の「Y」にならない語、すなわち述語にならない語は「Y+なる／する／化(する)」の形にはならない⁴⁾(以下、*は明らかに不自然な文を、?はやや不自然と思われる文を表す)。

(9) *彼の出発は {密かだ／密かになった}

(10) a. *その白鳥は瀕死だ。

b. *怪我がその白鳥を瀕死にした。

c. *公害で野鳥が瀕死化した。

宮島(1994)も述べているように、形容詞に「終止用法がないものは、けっこうある」⁵⁾。終止用法とは、文末の言い切りの形のことであり、それがないということは、すなわち述語にならないことを意味する。したがって、そのような形容詞は全て「～なる」の形にはならない。例えば「とてつもない、つつがなく、しがない、遙かな、些細な、敬虔な」等である。名詞の中にも「無意識、悲嘆、細心、傷心、最愛」等のように、形容詞性の強い語に同じ傾向が認められるものがあり、これらはやはり「なる」に前接しない。

一方で、厳密に言えば述語にならないわけではないが、指定文の述語にはなりにくいものとして、「会議、結婚式、音楽会、遠足、リレー、泳ぎ」等の出来事名詞がある。

(11) ?これは運動会だ。

これらの名詞が指定文の述語になりにくいのは、指定文が、「Wは何か、あるいはどのようなものかと言えば、Yである」と、Wの性質、特徴、状態等について解説するものであって、「～が行われる」「起きる」等の動きを表すことができないからであると考えられる。これらが述語となるのは(12)のような指定文の場合であり、したがって、これらの名詞で「なる／する」に前接するのは、指定文と平行している(13)のような場合である。

(12) 太郎が一番好きなのは運動会だ。

(13) 徒競走で優勝してから、太郎が一番好きなのは運動会になった。

しかし、同じ出来事名詞でも、「雨、雪、霰、吹雪、晴れ、時化、凧」等は指定文における述語になり、(14)のように前接しうる。

(14) 今日は、日本海側は {晴れた／晴れになった}。

「雨、雪、霰…」等が指定文の述語になりうるのは、その出来事が続いているという状態を表しうるからではないか。「日本海側は雨だ」は、「日本海側の上空の様子はどうか」といって、晴れている状態だ」という意味である。これらの語に状態性が読みとれることは、「会議、結婚式…」等はc)の制約に触れるが、これらは触れないことからわかる(3.1.3参照)。しかし、この点については更なる検討が必要である。

3.1.2 変化する前の状態が考えられない語

「～なる／する／化(する)」は基本的に「X(初めの状態)→Y(結果状態)」への状態変化を表す表現である。したがって、「Y+なる／する／化(する)」の形を取った場合、そこにはY(結果状態)になる前の状態、すなわちX(初めの状態)が存在することが前提となる。よって、この「～なる／する／化(する)」の持つ本質的な性格に反するものは前接できない。そのような語としては、1)初期状態を表す語、2)生得のものを表す語、3)対立する概念を持たない語、4)現在の状態しか表し得ない語、がある。下の(15)・(16)は1)の、(17)は2)の、(18)は3)の、(19)は4)の例である。

- (15) *彼女は初々しくなった。
- (16) *彼は彼女を先妻にした。
- (17) *彼は生真面目になった。
- (18) *彼らの友情は麗しくなった。
- (19) *彼は私の叔父に当たるようになった。

例えば、(15)の場合、「初々しい」が初期状態を表し、「初々しくなった」は時間軸に逆行しているため不自然である。言い換えれば、変化した結果が「初々しい」という状態は考えられないため不自然である。また(17)の「生真面目」は生得のものであり、変化してそうなるとは考えにくい。(18)も、麗しい友情に対立する汚い友情というものが考えにくいため不自然である。(19)の「当たる」は、現在の状態しか表せず、やはり「なる」をつけると不自然である。この制約に触れる語としては、他に形容詞では「うぶだ、あどけない、幼い、(考え方が)あおい、気高い、無知だ、腹黒い、おめでたい、有能だ、潔癖だ」等、名詞では「幼児、未成年、幼年、良家、生み立て、なま、新人、駆け出し」等がある。

さらに、前節で挙げた出来事名詞をここでも挙げることができる。これらは文字通り無からの出来事の発生や行為を表しており、前の状態が考えられない。よって、この点からも「なる」等とは共起しない。ただし、出来事名詞でも上にも挙げた「雨、雪、曇…」のような変化する前の状態が想定されるものは前接しうる。

なお、動詞の共起制限は、上述した、現在の状態しか表せない語のみで、これに当たる語には「当たる、該当する、現存する」等がある。

3.1.3 時間軸上の一時点にのみ限定された事態を描写する語

時間軸上の一時点にのみ限定された事態を描写する語は、あくまでもその場、その状況下における話者の言表態度を表す。このような語は一定期間持続するものとは捉えられていないため、「状態」として認知されにくい。この点で状態変化を表す「～なる／する／化(する)」と相反する性格を持っており、それ故に共起しない(しにくい)と考えられる。

語を、一時点に限定された描写の語とそうでない語とに分けるには、「しばらく(の

間)／～間」等の期間を表す語や、「前から」等の起点からの経過を表す語がつくか否かを指標にすることができる。このどちらの言葉もつかない語は時間の幅を持たない、極めて点的な語であると言える。このような語には、以下の五種類が挙げられる。

- 1) 「有り難い、心憎い、恐れ多い、残念だ、意外だ、心外だ、無念だ、遺憾だ、不本意だ」等の感情形容詞

(20) a. *私は {しばらく／前から} 有り難かった。

b. *手伝ってもらって有り難くなった。

- 2) 「望ましい、喜ばしい、願わしい、適当だ、当然だ、もっともだ、結構だ」等の判断を表す形容詞

(21) a. *重要な問題を会議にかけることは {しばらく／前から} 当然だった。

b. *重要な問題を会議にかけることは当然になった。

c. *彼は、重要な問題を会議にかけることを当然にした。

d. *重要な問題を会議にかけることは当然化した。

- 3) 人の行為を評価的に叙述したり、ある具体的な行為を根拠にそのような行為を行った人物（またはその状況そのもの）を話者が評価的に叙述する形容詞⁹⁾

(22) a. *分かっていて知らん顔するなんて、あいつは {しばらく／前から} 白々しかった。

b. *分かっていて知らん顔するなんて、あいつは白々しくなった。

3) に当たる語には「賢い、図々しい、はしたない、現金だ、無茶だ、真っ平だ、健気だ、不注意だ、ぞんざいだ、無礼だ、不作法だ、野暮だ」等がある。ただし、これらの語でも人やものの恒常的な性質を表せるものは、(23)のような文脈でならば前接可能である。

(23) 彼女は年取って大分図々しくなった。

- 4) 程度の大きいことをプラスイメージで表す「目覚ましい」

(24) a. ?新庄の活躍は {しばらく／前から} 目覚ましかった。

b. ?大リーグに移ってから、新庄の活躍は目覚ましくなった。

- 5) 事態解釈を表す名詞

事態解釈の語とは影山（1999）によるもので、「時間の流れの中で切り取られた一時点での状態を述べる」語を指している。影山（1999）は例として「乗客」を挙げ、「乗客というのは、乗り物に乗っているときしか成り立たない一時的な性質である」と説明している。影山（1999）はまた、「ヴァイオリニスト、物理学者」等の、事態解釈に対して「個体に固有の永続的な性質を述べる」語を個体解釈と呼んでいる。下のように、個体解釈の「医者」は問題なく「なる」等と共起するが、事態解釈の「乗客」は共起しない。

(25) a. あの人は 30 年間医者だった。／あの人は前から医者だ。

b. あの人は医者になった。

(26) a. *あの人は {しばらく／前から} 乗客だ。

b. *あの人は乗客になった。

すなわち、「乗客」は時間の幅を持たない、極めて点的な語であると言える。このような名詞としては「空き缶、あまり物、忘れ物、痴漢、酔っ払い、差出人、通行人、患者、所持金、遺族、アベック、欠席者」等、および前述の「会議、結婚式…」等の出来事名詞がある。ただし、同じ出来事名詞でも、「雨、雪、曇…」等は

(27) 雨が降らないと思っていたら、今度は一週間雨だ。

のように指標となる語と共起することから、時間の幅を持っていると見なせ、制約には触れない。

また、事態解釈の語でも「空き地、空き部屋、飼い犬、野良犬、貧乏人、金持ち」等は(28)のように指標となる語がつけられ、「空き缶…」等に比べれば時間の幅が認められるため、(29)のように「なる」等に前接することができる。

(28) 隣りはしばらく空き部屋だった。／隣りは前から空き部屋だ。

(29) 隣りは引越して空き部屋になった。

現実世界では、缶が空き缶である期間と、部屋が空き部屋である期間に差がない場合もあるだろう。両者の違いは、現実には時間の幅があるか否かではなく、話者の捉え方にそれがあるか否かにあるのである。

3.1.4 他に特定の言い方があり、そちらを優先させる語

この制約に触れるのは、形容詞の場合、下のように意味が特殊化している場合である。

(30) *夜が白くなる。（「夜が白む」の意味で）

名詞では、「満足、安心、賛成、反対、流行」等、変化を表す場合サ変動詞形を用いる語がある⁷⁾。また、前述した出来事名詞はここでも該当すると考えてよい。

- (31) *私は満足になった。
 (32) *今年の冬はインフルエンザが流行になるそうだ。

3.2 他の変化タイプとの関係

ここまで、属性変化において共起しない（しにくい）語にどのようなものがあるか見てきた。しかし、属性変化においては共起不可能だった語が、他の二タイプにおいては共起可能になる場合がある。どのような語が共起可能になるかは表1の通りである。ただし、これは、比較・対照を表す文脈、あるいは項目の交替を表す文脈を作ることによって、a)～d)の制約から外すことができる語があるという意味であって、制約そのものが無効になることを意味するものではない。

表1 属性変化では共起不可能だが、他のタイプでは共起可能になる語

	a) 述語にならない語			b) 変化前がない語			c) 一時点のみを表す語		d) 特定の言い方を優先する語	
	Adj.	N	出来事 N	Adj.	N	V	Adj.	N	Adj.	サ変 V
属性変化	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
比較・対照	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×
項目の交替	×	○	○	×	○	×	×	○	×	○

※「会議、結婚式…」等の出来事名詞は、本来 a)～d) 全てに該当するのだが、記述が煩雑になるため表1では a) の部分にのみ記載してある。

- (33) 以前より学生が幼くなった。
 (34) それ以後、太郎の一番怖いものは雷になった。

例えば(33)では、昔の学生と最近の学生を比較することで変化前を想定し、それによって、属性変化では「なる」に前接しなかった「幼い」が共起可能になるのであって、変化する前の状態が想定できないままに「～なる」の形になるわけではない。

あるいはまた、「雷」のような出来事名詞も、指定文であれば

- (35) 彼の一番怖いものは昔から雷だ。

のように述語になり、かつ「昔から」のような時間幅を表す言葉をつけることができる。そして、この指定文が(34)のような項目の交替を表す変化文になると、交替する前の状態が設定できるようになり、さらに、文の意味が変わるため優先されるべき特定の言い方（「雷が一鳴る」）が消滅する。その結果、(34)は a)～d) 全ての制約をクリ

アしたことになる。よって、属性変化では共起不可能だった語が、項目の交替を表す文では共起可能になった場合でも、制約そのものが無効になったとは言えない。

4. 前項との共起制限―「～する」に独自の制約―

前節までに述べた四つの共起制限は、「～する／化（する）」にも当てはまる。しかし、「～する／化（する）」には「～なる」にはない共起制限があると考えられる。つまり、「～なる」にはなるが、「～する」あるいは「～化（する）」にはならない場合があるということである。本節では、「～する」に独自であると考えられる共起制限について述べる。

「～する」に独自であると考えられる共起制限は、「XがYをZにする」において、「YをZにする」ことが、Xにコントロールできない事柄である場合である。これは、金（2000）の言葉で言えば、「Xの関与度が低い」場合であり、野田（1991）の言葉を借りれば、Xが「主導権を持たない」場合である。例えば、(36)は自然だが、(37)は不自然である。

- (36) 父は息子を医者にした。
(37) ?父は隣の山田さんを医者にした。

これは、「隣の山田さんを医者にする」ことが、Xに当たる「父」にコントロールすることではないためである。「XがYをZにする」という表現は、「YがZになる」という表現の他動表現に当たる。他動表現は、基本的に働きかけられるものの意思性の有無が問題にならない場合に用いられる。言い換えれば、動作主がコントロールできる場合、あるいは主導権を握って行える場合に用いられるという特徴がある。「～する」は句であって一語の動詞ではないが、他動表現としての性格は一語の他動詞と同じであり、この制約は、一語の他動詞、例えば、「立てる」が、「棒を立てる」とは言えても、「太郎を立てる」とは言えないのと平行な関係にある。

この制約に触れるのは、主に感情形容詞および感覚形容詞である。感情、感覚形容詞は、(38)・(39)のように「～なる」では自然であるが、(40)～(42)のように「～する」にすると不自然である。これは、人の感情、感覚は、主体以外の人間にコントロールすることではないためであると考えられる。

- (38) 手紙をもらって彼女は嬉しくなった。
(39) 薬を飲んだら眠くなった。
(40) *私は花子を嬉しくした。
(41) *彼は私を不愉快にした。
(42) *催眠術師はその男を眠くした。

ただし、動作主が働きかけるのではなく、ある原因が引き起こすという文脈であれば、

- (43) 自分の口臭が課員一同を朝から不愉快にし、みんな迷惑しているに違いない。
(日刊)

のように、「～する」の形にできる形容詞が、「愉快だ、憂鬱だ、平気だ」等、例外的にいくつかある⁸⁾。「例外的に」としたのは、大部分の感情、感覚形容詞は、たとえ、ある原因が引き起こすという文脈にしても、

- (44) *彼からの手紙が私を嬉しくした。

のように、「～する」は成立しないからである。

5. 前項との共起制限―「～化(する)」に独自の制約―

「～化(する)」に独自の共起制限には三つあると考える。

第一に、和語は原則として「化」の前項にはならない。ただし、名詞の場合、以下のように一時的な造語として和語をつけることが可能である。

- (45) ゴミ化する放置ボート (NHK)
(46) キムチはすっかり「日本の食べ物」化している (朝日)

第二に、動詞前項の場合、状態動詞、状態変化動詞のうちの、結果状態の持続を表す語でなければ前接しない⁹⁾。例えば、「存在化、局在化、常在化、関係化」(状態動詞)、「肥大化、白濁化、安定化、統合化、細分化、縮小化、軽減化、乾燥化」(状態変化動詞)等は自然であるが、(47)のように、変化動詞でも結果状態の持続を表さない語や、(48)のような動作性動詞は前項にならない。

- (47) *国家の瓦解化 ←→ (「国家の荒廃化」は可)
(48) *捕虜を殺害化する。

この制約は、「～なる／する」で言えばc)の制約に当たるものと考えられるが、「～なる／する」の場合、動詞前項にはこのような制約はない。なぜなら、これらには習慣・繰り返しの定着を表す用法があるからである。例えば、結果状態の持続を表さない「死ぬ」や、動作動詞「食べる」が前項となった場合でも、「～なる／する」では、

- (49) 殺虫剤を変えたら、ゴキブリがバタバタと死ぬようになった。
(50) 母親はいろいろなサラダを作って、息子が毎日野菜を食べるようにした。

のように、一事態の移行ではなく、同一の、または類似した事態の複数回の発生による習慣、繰り返しの定着を表す文を作ることができる。このため、動詞前項の場合、結果状態の有無等は問題にならない。しかし、「～化（する）」にはこのような用法はなく、あくまでも一事態の移行しか表さない。このため、「～なる／する」にはなかった動詞の制約が生じるのである。

第三に、個人の心的態度を表す語は原則として前項にならない。これに当たるのは、感情形容詞、判断を表す形容詞、評価を表す形容詞である。これは、「～化（する）」が、個別の私的な物事を表しにくく、個人の評価が働く語とは相容れないことによると思われる。特に感情形容詞は話者の心的有様のみを述べる言葉であり、公的に認識されるものではない。したがって、感情形容詞は原則として全て前項にはなり得ない。ただし、判断、評価を表す語の場合、前項になる語がないわけではない。例えば、下のような文は自然である。

(51) 環境問題への取り組みが重要化した。

(52) 中でも、訪問販売、キャッチセールスなどの契約に関するトラブルが増え続けており、事業者の行為も悪質化し、その被害も高額化している。（都議会）

(51)は判断を表す語であり、(52)は評価を表す語である。このような、その状態を万人が認識しうるような場面であれば、判断や評価を表す語も前項になりうる。

ここまで、「～化（する）」の前項との共起制限について考察してきた。しかし、「～化（する）」の場合、通常「化」の前項になる語でも、ある文脈では「～化（する）」の持つ意味特徴ゆえに「化」と共起しない（しにくい）場合がある。次にこの点について述べる。

まず、「～化（する）」の基本義は属性の変化であって、項目の交替は表しにくい。

(53) *若者の好きな食べ物はキムチから日本の食べ物化した。

(54) キムチはすっかり「日本の食べ物」化している（朝日）（再掲）

同じ「日本の食べ物化」という言葉が、項目の交替を表す(53)では不自然だが、属性変化を表す(54)では成り立つということは、「～化（する）」が項目の交替を表しにくいことを意味している。

また、「～化（する）」には「～なる／する」に見られる形骸化した用法がない。例えば、(55)のように、「～なる」がコピュラ化して「～である」に近い意味を表す場合や¹⁰⁾、(56)のように、「～にする」が慣用的、固定的に用いられている場合「～化（する）」は使えない（使いにくい）。

(55) この会議の場で一番 {問題になる／？問題化する} のは不良債権処理である。

(56) 本稿では、「～なる」を {中心にして／*中心化して} 論ずる。

(55)の「問題」は、

- (57) 環境汚染が問題化しつつある台湾はもとより「中国や東南アジア諸国でも環境分析の需要が高まる」(石井修社長)とみる。(日経)

のように、変化を表す言い方であれば「化」に前接しうる。すなわち、「問題」という語が常に「化」の前項にならないのではなく、(55)のような文脈では使いにくいということである。このように「～化(する)」は、典型的な変化表現から外れた用法を持つ「～なる／する」と異なり、あくまでも一事態の変化を表すという領域を出ていないことが分かる。

このように、「～化(する)」の意味領域は「～なる／する」よりも狭い。この他にも、「～化(する)」は、個別の物事、あるいは私的な物事の一過性の出来事は表しにくいという点でも「～なる／する」より意味領域が限られている。このため、例えば、

- (58) 改訂した結果、新しい辞書は{3万語になった／*3万語化した}。

- (59) 全国の郵便番号が一斉に7桁化された。

を見ると、同じように数字に「化」をつけるのでも、(60)のような個別の出来事では「～化(する)」は不自然だが、(61)のような総合的、全体的な物事の場合は自然である。また、

- (60) ?隣の息子のいたずらは悪質化してきた。

- (61) 中でも、訪問販売、キャッチセールスなどの契約に関するトラブルが増え続けており、事業者の行為も悪質化し、その被害も高額化している。(都議会)(再掲)

のように、「隣の息子」のような私的な物事の場合「～化(する)」は使いにくい、公的な物事の場合は「～化(する)」を用いることができる。

さらに、「～化(する)」は、(62)のような恒常的な変化の方が表しやすく、(63)のような一過性の出来事は表しにくい。

- (62) 脂肪分の取りすぎで細胞が肥大化した。

- (63) ?薬の作用で細胞が一瞬肥大化した、じきに戻った。

「～化(する)」の、このような意味特徴はどこから生じるのであろうか。それは、この言葉が硬い言葉、つまり文章語であることによると考えられる。宮島(1994)は、日常語と文章語を比較して、単語の文体的性質を考察している。この中で宮島(1994)は、一般に「文章語の方が意味的に限定されていることが多い」とし、文章語が日常語に比べて偏りがちな分野、方向として、1)大規模な事柄、2)公的な事柄、3)

抽象的な事柄、4) 良い事柄、を挙げている。このうち、4) は「～化 (する)」に関しては当てはまらないが、1) ～3) に関しては「～化 (する)」の意味特徴と一致している。「～化 (する)」の場合、必ずしも大規模なことを表すとは限らないが、個々の物事よりも総合的、全体的な物事を表しやすいということは、1) と重なるものである。「～化 (する)」が一時的、現象的な変化を表しにくいのは、これらのことと無縁ではないように思われる。抽象的、総合的な物事の変化というものは、一過性の出来事よりも一般化されているという点で、本質的、永続的な変化と結びつきやすいと考えられるからである。ただし、これは絶対的な制約ではない。例えば、

(64) その国は、1年間だけ関税を自由化したが、その後元に戻した。

のような文は可能であり、必ずしも一時的なことが表せないとはまでは言えないからである。

6. 「～なる」「～する」「～化 (する)」の関係

ここまで、「～なる」「～する」「～化 (する)」とその前項との共起制限を考察してきた。全体的に言って、「～なる」が最も制約が少なく、「～する」、「～化 (する)」の順で制約が多くなる。「～する」の制約が「～なる」よりも多いのは、これが他動詞であることによる。また、「～化 (する)」がさらに制約が多いのは、この表現が文章語であること等から、前二者より意味領域が狭いためである。そしてこのことが、「～なる／する」に比べて「～化 (する)」の形になりにくい場合を多く作り出している。

ここまで述べてきた三者の関係をまとめると表2のようになる(次ページ参照)。表中、○は問題なく共起可能な(または表せる)ことを、△は共起できない(または表せない)ものが多いことを、×は基本的に共起できない(または表せない)ことを示す。－は、その条件に該当する語がないことを意味する。なお、表2は属性変化を基準としてまとめている。ただし、j) に関しては、「～なる／する」の場合、全く共起不可能な「～化 (する)」と違い、共起可能ではあるので「○」をつけたが、属性変化を表すことはできず習慣・繰り返しの解釈になる。

7. 日本語における変化の捉え方

初めに述べたように、「～なる／する」も「～化 (する)」も、変化の手段や対象に制約がないことから、純粋に「変化」のみを表す表現であると言ってよい。この三つの表現が共通して持つ共起制限から、日本語において「変化」がどのように捉えられているか、言い換えれば、「変化」を表現するには、最低限何が要求されるのかが浮き彫りになる。すなわち、日本語において「変化」を表すには、そのタイプがどのようなものであれ、最低限変化前の状態Xと変化後の状態Yが想定でき、「対象WはY」の

表2 「～なる」「～する」「～化(する)」の関係

	前 項	～なる	～する	～化(する)
共起制限	a) 述語にならない語	×	×	×
	b) 変化前の状態がない語	×	×	×
	c) 一時点にのみ限定された事態を描写する語	×	×	×
	d) 他に特定の言い方がありそちらを優先する語	×	×	—
	e) 感情形容詞	○	△	×
	f) 判断を表す形容詞	○	○	△
	g) 評価を表す形容詞	○	○	△
	h) イ形容詞	○	○	×
	i) 和語の名詞	○	○	△
	j) 非状態性の動詞	○	○	×
変 化 の タ イ プ	比較・対照を変化と捉える場合	○		○
	項目の交替	○		×
意味特徴	具体的、個別の私的な変化	○		×
	一時的、現象的变化	○		△
	周辺的用法	あり		なし

※ただし、e)～i)はa)～d)に該当する語を除く。

形で結果状態を表すことができ、かつある程度時間幅の認められる語を必要とする。この上に、「～する」であれば、他動表現としての性格からそれに独自の制約が生じ、「～化(する)」であれば、語構造上の制約、文章語としての性格等から、「～化(する)」に独自の制約が生まれ、最低限必要な条件にそれらが付加されるという段階を踏むと総括できる。しかし、これら四つの共起制限同士の関連性や、四つの中に優先順位があるのか否か等については考察しきれなかった。これらについては今後の課題である。

付記：本論文は2002年3月、北海道大学から学位を授与された博士学位論文の一部であり、2002年6月23日に行われた北海道大学国語国文学会春季大会における研究発表を加筆・修正したものである。

注：

- 1) 西山(1995)はこのような文を「値比較の変化文」と名付けている。ただし、西山は「～が変わる」・「～を変える」という表現を扱っており、「なる文」等は直接扱っていない。
- 2) 西山(1995)はこのような入れ替わりを示す変化文を「値変化」と呼んでいる。
- 3) この他に西山(1995)は、「魔法使いはカボチャを馬車に変えた」のような、ある

- 対象が全く別の対象に変化することを表すものを同定変化文として挙げている。
しかしこれは、あるものがあるものに入れ替わるという点で口)と共通しており、
共起制限も口)と同じであると見なせるため、本稿では口)に含めることとする。
- 4) この点に関しては、川口他(1991)に記述がある。ただし、これには名詞についてしか言及がなく、また指定文についても触れられていない。
 - 5) 本稿では、「明るい、やさしい」等をイ形容詞、「元氣だ、複雑だ」等をナ形容詞とし、両者を併せて形容詞と呼ぶ。宮島(1994)のいう形容詞は、本稿におけるイ形容詞のみを指すが、ナ形容詞も同様であると考ええる。
 - 6) 吉川(1995)はそのような形容詞文を一時的性状評価を表す文としている。
 - 7) サ変動詞形があるにもかかわらず「～なる」が併用される場合がある。一つは、「雨で運動会が中止になった」のように、自動詞化するために「～なる」を使っていると思われる場合である。今一つは、「協議の結果、今年度の入学試験は10時開始になった」のように「～することになる」の「～すること」が省略されたと考えられる場合である。
 - 8) 「XがYをZにする」のXの意味役割が、どのような場合に動作主と解釈され、どのような場合に原因と解釈されるのか、また、「XがYをZにさせる」との関係はどのようなものであるのか等については、金(2000)に詳しい。
 - 9) 森山(1988)は「しばらく」「～間」のような単純期間を表す語と共起しうるか否かというテストによって、動きの結果が持続的である語と、永続的(非可逆的)な変化を表す語、つまり動きの結果に持続がない語を区別している。
 - a. 一時間窓を開けた。 → 結果の持続を表す
 - b. *一時間死んだ。 → 結果の持続を表さない
 - 10) コピュラ化した「～なる」については高橋(1994)、仁田(1997)に記述がある。

参考文献：

- 池上素子(2000)「『～化』について—学会抄録コーパスの分析から—」『日本語教育』106号
- (2002)「変化を表す『なる』—前接する語との共起制限を中心に—」『日本語教育』112号
- 池上嘉彦(1981)「『する』と『なる』の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—」大修館書店
- 影山太郎(1999)『西光義弘編集 日英語対照による英語学演習シリーズ2 形態論と意味』くろしお出版
- 川口義一・小宮千鶴子・新屋映子・熊井浩子・守屋三千代(1991)『日本語を教える2 日本語教育チェックブック ポイントをおさえる教え方』バベル・プレス
- 金熹成(2000)「状態述語文の他動化と使役化—意味的特徴を中心に—」草薙裕編『現代日本語の語彙・文法』くろしお出版

- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』 むぎ書房
- 西山祐司 (1995) 「コピュラ文の意味と変化文の曖昧性について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 27 号
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』 くろしお出版
- 野田尚史 (1991) 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』 むぎ書房
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法』 くろしお出版

用例出典：

- (NHK) クローズアップ現代 '99.9.14 放送番組のタイトル
- (朝日) 朝日新聞 '99 年 8 月 24 日の記事
- (日刊) 日刊スポーツのホームページ 健康連載・リストラ時代のサラリーマン症候群
42 回 http://www.nikkansports.com/news2/health/11/he11_42.html
- (都議会) 東京都議会のホームページ 都議会リポート平成 13 年春号 第一回定例会・一般質問要旨 <http://www.gikai.metro.tokyo.jp/report/report13/1102a013i.htm>
- (日経) 日経ネット関西版のホームページ ビジネス・'01.9.4 の記事 播磨の中小企業、世界めざす <http://www.nikkei.co.jp/kansai/business/2590.html>

(いけがみ もとこ・北海道大学留学生センター非常勤講師)